〔中国の陶磁展によせて〕

館蔵「三彩立女」の衣装について

— 髪形を中心に —

唐時代の詩人白居易（772～846）の詩文「上陽白髪人」には、楊貴妃に美貌を妬まれて離宮に幽閉され、空しく老境を迎えた女官の装いが次のように記されています。

「小頭鞋履窄衣裳　青黛点眉眉細長
外人不見見応笑　天宝末年時世妝」

先の尖った履、ぴったりとした衣服、細長く描いた眉という姿は、失笑を誘う時代遅れの天宝年間（742～755）末年のものであると言います。唐時代の詩文などには、女性の服飾や化粧・髪形への言及が散見され、それらによって、衣装の流行が目まぐるしく転変したことが窺われます。

このような衣装の流行という点から、唐時代の美人像として広く知られる大和文華館所蔵の「三彩立女」（図1）を捉え、そこに映し出された世相を考えてみましょう。

鬢を張り出して大きくとり、髻を丸くつくり、額の上方に比較的小さな髷を垂らした髪形をしています。この髪形は、当時「倭堕髻」と呼ばれていたとする説があります。

眉間には赤で花形のような紋を、頬骨のあたりには白で梅花紋を点じています。前者は「花鈿」、後者は「妝靨」という化粧です。眉を黛で描き、頬紅を塗り、口紅を引いた化粧の様子も表現されています。

上衣は、筒形の長い袖をした「衫」に、半袖の「半臂」を重ねています。その上から胸高に「裙」を穿いています。肩にはリボン状の「帔」を掛けています。衫・裙・帔から成る構成は唐時代を通して女装の基本となっていましたが、半臂は開元（713～741）・天宝年間を中心とする期間に限って流行したと言われています。

足には、つま先が反り上がって尖った履をはいています。

このような衣装は、「上陽白髪人」で時代遅れとされていた装いに通じていましょう。従って、まず天宝年間末年より遡る風俗と見做せます。

より詳細な事象については、類品が手掛かりを与えます。中でも、西安市（かつての都長安の所在地）の鮮于庭誨墓から出土した副葬品（図2）が基準作として位置づけられます。三彩の立女俑が４体、加彩陶の女騎馬俑が16体あり、男装を纏っている像やコートのような服飾をはおっている像もありますが、衫・半臂・裙の姿に徴すれば、形態および着装法は館蔵「三彩立女」と同様と言えます。帔の幅が広い点が、わずかな相違となりましょう。また、いずれの像も館蔵「三彩立女」と同種の髪形をしています。ただし、髷の形状には二股になったものなど差異が認められ、この髪形においては、髷がささやかなに個性を発揮する部位であったと知られます。

被葬者の鮮于庭誨は正史に伝記を残していませんが、出土した墓誌によって履歴が判明します。もともとは宮廷の下級軍人でしたが、玄宗皇帝に重用され、最終的に官は右領郡衛将軍に進み、上柱国を授かって北平県の開国公になりました。開元11年（723）に病没し、長安城の西郊に葬られたと伝えています。

立像も騎馬像も、大きく張り出した鬢・丸い髻・額の上方に垂れた小さめの髷、という特徴を備えた髪形を揃ってしていることには注意されます。同じ傾向は、西安市中堡村唐墓の副葬品にも認められます。三彩の立女俑が10体出土しており、いずれの像容も館蔵「三彩立女」と類似しています。10体は大きさで三種類に分類でき、それぞれで異なる職掌を担っていると考えられます。それが、駱駝に乗った歌手（図３）にまで同種の髪形が適用されています。この傾向は俑のみに限りません。長安県南里王村唐墓西壁に描かれた「六屏式仕女図」（図４）では、六人の女性がなべて同じ特徴を備えた髪形で描かれています。

以上のことから、館蔵「三彩立女」にみる髪形は、長安ではある集団をなす女性たちが揃ってとっていたことが浮かび上がってきます。鮮于庭誨が貴族階級にあっても“超”一流とは言い難いことからすると、ある集団とは、臣下の一流以下の貴族に近侍する者たちと考えられましょう。中堡村唐墓と南里王村唐墓とは墓誌が未発見であるため、被葬者については詳らかではありません。前者は鮮于庭誨墓と副葬品に共通点が多いことから鮮于庭誨なみの人物、後者は墓の規模から中小貴族かと推測されています。

このことは、神龍２年（706）の永泰公主墓および同年の懿徳太子墓と、景雲２年（711）の章懐太子墓とにおける女性像の相違が傍証となりましょう。被葬者はいずれも皇族ですが、章懐太子のみは臣下に降格されました。皇族と庶民とでは墓の構造や副葬品に区別があり、章懐太子墓には臣下としての性格が備わっています。永泰公主墓・懿徳太子墓に見られる女性たちが多様な髪形をしているのに対し、章懐太子墓では、ほぼ揃って館蔵「三彩立女」の前身として捉えられる髪形をしています（図５）。その後、天宝４年（745）の蘇思勗墓の女性像には、館蔵「三彩立女」の後身として捉えられるものも交えて多様性に富む髪形が見られます（図６）。蘇思勗は玄宗皇帝の寵を厚く受けた宦官であり、その墓は超一流の貴族に相応しい規模を備えています。章懐太子墓と蘇思勗墓の女性像に徴すれば、館蔵「三彩立女」はおよそ開元年間に収まる時期の長安の風俗を伝えているものと推測されましょう。

開元年間は玄宗皇帝が則天武后を倒して親政を開始した刷新期にあたります。或いは、そうした政治下で階級制度のように行われていた髪形なのかも知れません。

（澤田和人）

図1

図2

図3

図4

図5

図6

季刊 美のたより №137
平成14年１月５日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.